ブルク・バッハ室内合唱団
第8回演奏会

2024.10.26（土）

開場 13:30　開演 14:00

彩の国さいたま芸術劇場音楽ホール

主催：ブルク・バッハ室内合唱団演奏会実行委員会
後援：新座市文化協会、新座市合唱連盟、
NPO法人日本声楽家協会、東京藝術大学音楽学部同声会

ごあいさつ

本日は、ブルク・バッハ室内合唱団第８回演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

私たちはバッハを歌うことを目的とする合唱団で、今回はバッハのカンタータ第12番を演奏します。選曲には意見を集め話し合い、数か月の時間をかけて検討しました。一度決まるとこの曲への熱量の高まりと、技術的にも難しい歌唱にも積極的にチャレンジし、リハーサルを繰り返しながら今日を迎えることができました。

本公演はソリストにメゾソプラノ後藤真菜美さん、テノール河野泰佑さん、バリトンの高橋宏典さん、オルガニストの加藤麻衣子さん、そして東京藝術大学バッハカンタータクラブ演奏委員長でオーボエの酒井弦太郎さん、同クラブ有志メンバーと共に、バッハの音楽をお届けします。

また、近年の国内外の作曲家の作品も演奏します。2020年以降の作品もあり、数十年バロック音楽と向き合っていた合唱団がこれらの新しい音楽をどのように演奏するか、お楽しみいただければ幸いです。

最後にこの場をお借りして、ご後援いただいた関連団体や組織の皆様、演奏会実行委員の皆様、本日の運営スタッフの皆様に心から感謝申し上げます。

ブルク・バッハ室内合唱団常任指揮者

谷川　晃

本日はご多忙の中、ブルク・バッハ室内合唱団第８回演奏会にお越しいただき、誠にありがとうございます。

2003年の笹倉強先生による当合唱団の設立以来、崇敬するバッハの作品を中心にした古典音楽を学びたい想いを持つ者たちが活動してまいりました。

2021年に笹倉強先生のご勇退後、新たに谷川晃先生を常任指揮者に迎え、現在はバッハのほかに、ルネサンス、現代の宗教曲、邦人曲等、幅広く取り組んでおります。

前指揮者の教えを基本とし、谷川先生の新風をプラスしながら、一歩一歩進んでおります。

本日は新ブルク・バッハ室内合唱団が心を込めて演奏をお届けいたします。

ご来場いただきました皆様には、心より感謝申し上げます。

ブルク・バッハ室内合唱団第８回演奏会実行委員長

深津 詔子

Program

第1部　近年の音楽

（外国人作品 & 邦人作品）

John RUTTER 作曲 / 谷川 晃 オケ版編曲　　室 内 楽：東京藝術大学 バッハカンタータクラブ

Go Forth Into the World in Peace
This is the day　　オルガン：加藤麻衣子

松波千映子 作曲 / 谷 郁夫 作詩　　ピ ア ノ：徳増百合子

道順 混声合唱とピアノのための「五つの愛の言の葉」より

高嶋みどり 作曲 / 谷川俊太郎 作詩　　ピ ア ノ：徳増百合子

未来 混声合唱組曲「風に鳴る笛」より

Ivo ANTOGNINI 作曲　　ア・カペラ

O Filii et Filiae
Memorare

森田花央里 編曲 / 山田耕筰 作曲 / 三木露風 作詩　　ピ ア ノ：鶴井弥葉

Akatombo and Ballad 混声合唱組曲「ジャポニズム＆ジャズ」より

信長貴富 作曲 / 覚 和歌子 作詩　　ピ ア ノ：鶴井弥葉

リフレイン 覚 和歌子の詩による混声合唱曲集「等圧線」より

休 憩

第2部　バロック音楽

Henry PURCELL　作曲　　オルガン：加藤麻衣子

Lord, How Long Wilt Thou Be Angry

Johann Sebastian BACH　作曲

Verleih uns frieden gnädiglich　*Kantate BWV 126* より
Mir hat die Welt trüglich gericht't　*Matthäus-Passion BWV 244* より
Dona nobis pacem　*Messe in h-Moll BWV 232* より

室 内 楽：東京藝術大学
バッハカンタータ
クラブ
オルガン：加藤麻衣子

Johann Sebastian BACH　作曲

Kantate BWV 12 — Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen

1. *Sinfonia*
2. *Chorus*
3. *Recitativo (Alto)*
4. *Aria (Alto)*
5. *Aria (Basso)*
6. *Aria (Tenore)*
7. *Choral*

室 内 楽：東京藝術大学
バッハカンタータ
クラブ
オルガン：加藤麻衣子

メゾソプラノ：後藤真菜美
テノール：河野泰佑
バリトン：高橋宏典

曲目解説

第１部　近年の音楽（外国人作品＆邦人作品）

John RUTTER（1945～） はイギリスの作曲家で「Magnificat」や「The Lord bless you and keep you」など宗教合唱曲の代表格。**「Go Forth Into the World in Peace」**（1989）の歌詞はイングランド国教会から始まった聖公会教会祈祷書から作曲。平和の心を持つことがもたらすことを、美しい音楽で語る。**「This is the day」**（2011）はウェストミンスター寺院で執り行われたウィリアム王子とキャサリン妃のロイヤルウェディングのために作曲。歌詞は詩篇Psalms 18,148,91,121 and 27より。聴いているだけで心が躍り、幸せな気持ちにしてくれる、ラターの特徴が詰まった作品。オケ版の編曲にてお楽しみください。

松波千映子（1978～） はジャズや映画音楽などの作曲も学び、多岐にわたる作編曲が特徴。**「道順」**（2022）の歌詞は谷郁夫の34篇の「愛の詩集」の一つ。家族、恋人、親友など身近になればなるほど感謝や幸福感に気がつかないことも多い。8分の12拍子の心を揺さぶる旋律が、大切な人やモノとの絆、幸せとは何かを考えさせてくれる。

高嶋みどり（1954～） はNコンの課題曲でもおなじみの作曲家。**「未来」**（1989）の歌詞は谷川俊太郎（1931～）。未来に向かっていく世界が明確に理解できる強いメッセージの作品。詩中の竹竿と青空、昇華など言葉や文章の広い世界観を感じ取ることができる作品。

Ivo ANTOGNINI（1963～） はスイスとイタリアの国籍を持つ作曲家。スイス・イタリアでピアノやジャズを学び、映画音楽の制作を始める。その後カリカンタス合唱団とのコラボをきっかけに合唱作品に注力。瞬く間に世界中の合唱団が彼の作品を取り上げた。**「O Filii et Filiae」**（2014）の 歌詞はJean Tisserand（d.1497）作で復活祭を祝う賛美歌。**「Memorare」**（2021）の歌詞はBernardus Claravallensis（1090-1153）作で聖母マリアに神への執り成しを願う祈り。世界の人々が歌うアントニーニの合唱をお楽しみください。

森田花央里（1987～） はジャズピアニストとして舞台「祝女～shukujo～」season 2に出演するなど多彩な作編曲家、ピアニスト。本日演奏する**「Akatombo and Ballad」**（1927作,2019編曲）がジャズピアノにのってどのような物語が作り出されるのかお聴きください。

信長貴富（1971～） の作品は演奏する側も聴く側もリピート率が高く、本日の**「リフレイン」**（2009）もまさにその一つ。歌詞は覚 和歌子（1961～）作で、何度も歌われる「くりかえし〇〇」というメッセージとメロディーは、時間軸を大きく広げて、自分事として捉えるこができる。

第２部　バロック音楽

Henry PURCELL（1659～1695）はイギリス人の作曲家。英国王室付きの音楽家兼作曲家としてウイリアム２世からの信頼も厚かった。ウェストミンスター寺院を職場として、オルガン奏者でもあり、付随音楽や教会音楽の作曲もしていた。オペラ『ディドとエネアス』は日本でもよく取り上げられている。「*Lord, How Long Wilt Thou Be Angry*」（1680-82頃）は聖公会教会音楽で、アンセム（*anthem*）と呼ばれる讃美歌。歌詞は詩篇*Psalms* 79：5,8,9,13より大きく３区分で、①神の怒りを退ける祈り、②救いの嘆願、③感謝の誓いを歌う。冒頭は５声の模倣された旋律が徐々に組み合わさり、パーセルの特徴でもある言語表現のために、半音階で遷移したり、跳躍させたりと複雑なハーモニーが生まれる。本日はＳＳＡＴＢ＋オルガンで演奏する。

Johann Sebastian BACH（1685～1750）はドイツを代表する作曲家で、17、18世紀の人間で今でもその名が通る大筆頭である。また、教会音楽の印象が強く、非常に格調高いと感じるのが一般的だ。演奏する側も最初から最後まで全部やらなければバッハでない、という先入観も強いのが実態である。今回は教会暦にしばられることなく、一つの音楽作品として次の３曲をＳＡＴＢ＋オケで演奏する。

「*Verleih uns frieden gnädiglich*」カンタータ第126番終曲のコラール。*Martin Luther*（1483～1546）のコラールの第１節に*Johann Walter*（1496～1570）のコラールが付加節として加わった作品。補足だが、カンタータ第126番の福音書章句は“種を蒔く人のたとえ話”（ルカ8:4-15）である。これは、「謙虚な姿勢で、より実直に、そして心から神を崇拝することで、神から祝福された豊かな生活を過ごすことができる。」ということが本質にある。“私たちの神への信仰の深さを表し、私たちに平和を、そして穏やかで幸せな生活を送れますように”と深い祈りを捧げるコラールである。人生経験の高い、深い表現を目指している。

「*Mir hat die Welt trüglich gericht't*」マタイ受難曲の32番目に出てくる、*Adam Reusner*（c.1496-1575）のコラール第５節を用いた作品。「世の中は私を嘘と偽りの言葉で裁こうとした。主よ、私を偽りの策略から守ってください！」と歌う。歌詞だけ見ると非常に重い曲になりそうだが、作品自体は長調で音楽だけ聴くと華やかな曲に聴こえる。言葉と少し合わない印象を持たれるかもしれない。しかし、この曲にはある種からくりのような意図があり、例えば冒頭は４拍目から始まり、その後は歌詞の区切や韻が１拍目に来るように５回ほど続く。最後は３拍目で終止となる。４拍子のなのに３拍子のような…。まさに言葉で出てくる“偽り”や“多くの網と密かな縄（罠）”を、この短い曲で表現している。最後は“不正の企みから護ってほしい”と歌う。

「*Dona nobis pacem*」*BWV* 232ロ短調ミサの終曲。「*Dona nobis pacem*」は「われらに平安を与えてください。」。大曲の終曲にふさわしく、単独でも名曲といえるような位置づけである。

　バッハの特徴の一つであるパロディの多用という観点でこの作品の掘り下げてみる。パロディとは別の作品を他の作品に転用すること。「*Dona nobis pacem*」の原曲は“*Wir danken dir, Gott, wir danken dir*”*BWV 29*“神よ、私たちはあなたに感謝します”の２番合唱で、歌詞は”神よ、あなたに感謝します（詩篇75:2）”。実はロ短調ミサの７番目の「*Gratias agimus tibi*」“私たちはあなたに感謝します”も*BWV 29*が原曲。

　本日演奏する「*Dona nobis pacem*」はこれら感謝の旋律にラテン語の“われらに平和を与えてください”と歌う。“与えてほしい”に加え、“感謝する”という明確な意図が含まれていることを意識した演奏をお届けしたい。

Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen BWV 12　泣き、歎き、憂い、怯え
Kantate zum Sonntag Jubilate　復活節後第３日曜日のためのカンタータ第12番

歌詞：*Salomo Franck*（サロモ・フランク）　初演：1714/4/22
教会暦：復活節後第３日曜日
書簡章句：第一ペテロ 2:11-20　福音書章句：ヨハネ 16:16-23

本日の編成：ソリスト（ＡＴＢ）、合唱（ＳＡＴＢ）、トランペット、オーボエ、
ヴァイオリン２、ヴィオラ２、通奏低音（チェロ、ファゴット、オルガン）

＜バッハ作品の楽しみ方：教会暦を探ってみましょう＞

世の中でクリスマス、イースターという言葉は馴染みがあり、ペンテコステ（聖霊降臨日）を加えてキリスト教の三大祝日である。例えばイースターの前後にも御祝行事が催される。バッハの作品は教会暦と呼ばれる特定の祝祭日に演奏されることを前提に、それぞれで用いられる書簡章句（ローマ、コリント、イザヤなど）、福音書章句（ルカ、ヨハネ、マタイなど）と関連する形で歌詞が設定されており、朗読される聖句が何かを知ることはバッハ作品を理解するための一つの観点である。

具体的にBWV12では、第一ペテロ2:11-20。これはペテロの書いた第一手紙２にある２章の11～20までの文章を指している。その中で例えば「自由人にふさわしく行動しなさい。ただし、自由をば悪を行なう口実として用いず、神の僕（しもべ）にふさわしく行動しなさい」「僕（しもべ）たる者よ。心からのおそれをもって、主人に仕えなさい」と朗読される。

同様にヨハネ16:16-23「あなたがたは泣き悲しむが、この世は喜ぶであろう。あなたがたは憂えているが、その憂いは喜びに変るであろう。」とある。これらを更に抽象化すると「神の僕としての行動（生活）」「泣き、憂いは喜びに変わる」。本作品に付いている「泣き、歎き、憂い、怯え」に通ずるものが見える。このように教会暦を確認していくことで、この曲がどのような方針、またその方針を表現するための歌詞を決めているのか、読み解く大きな手掛かりになる。そして一番大切なのはどのような感情で演奏すべきか、各パートの役割、音楽的な展開の背景、テンポ感など様々な道筋が見える。この日曜日のカンタータは12番の他に、103番、146番がある。３つのカンタータとも、福音書の「ヨハネ16：16-23」に従って「苦しみ（悲しみ）から喜びへ」である。

<カンタータ第12番の聴きどころ>

1714年4月22日（日）に初演された初期の作品。1714年３月にワイマールの公爵宮廷のコンサートマスターに昇進して以来、２曲目に当たる。カンタータの歌詞は、神学的教養と詩的才能に恵まれた宮廷司書サロモン・フランク（1659-1725）が担当。

１．シンフォニア（ヴァイオリン２、ヴィオラ２、オーボエ、通奏低音）

オーボエと弦楽のシンフォニア（器楽のみの演奏形態）で幕を開ける。弦楽の非常に飽和した音（狭い音域や異なる音価が複雑な音楽を形成）の流れに乗ってオーボエの瞑想的な哀歌は何かを探し求めさまよっている世界を感じとれるであろう。ヴィオラが２声部ある珍しい編成も注目。（2.合唱、3.レチタティーヴォ３曲連続でヴィオラは２声部）

２．合唱（ＳＡＴＢ、ヴァイオリン２、ヴィオラ２、オーボエ、通奏低音）

この作品のタイトルにもなっている「泣き、歎き、憂い、怯え」は、当時はまだ新しいアリアの典型的な形式であるダ・カーポ構造（Ａ－Ｂ－Ａ）を採用し、３曲目のレチタティーヴォ（朗唱）を挟む形で、４，５，６曲目の連続するアリアと対照的なカンタータ構造を形成する重要な役割を果たす。（Ａ）は冒頭から合唱（ＳＡＴＢ）の各パートが「*Weinen, Klagen, Sorgen, Zagen*」と語り掛けるように音も重なり合いながら繰り返されていく。弦楽器は、１拍目と３拍目のみに張り付くような緊張感のある和音を進行させ、シャコンヌの厳格な低声部はゆっくりと半音階で下行を繰り返していく。歌詞にもある、悲嘆と苦痛（*Angst und Not*）を表している。中間部の（Ｂ）は「*Die das Zeichen Jesu tragen*」（彼ら（僕たち）はイエスの証（あかし）を担っている）という歌詞を長調でキリストを信仰する者たちの苦しみや試練を歌う。「*das Zeichen Jesu*」（イエスの証）は27回、「*tragen*」（身に帯びた）を複数回にわたり、メリスマ唱法で歌い上げて、イエスに対する信仰の深さや喜びも表している。（Ｂ）の最後の「*Tragen*」は信仰の喜びを持ちつつも、重い苦しみや試練を持ち合わせているという意図が含まれ、悲嘆と苦痛のシャコンヌに戻っていく。

また、35年後に作曲されるロ短調ミサの*Crucifixus*「十字架につけられたまいし者」に転用されている。バッハ自身この12番で作曲したシャコンヌは、悲嘆と苦痛を表す修辞的な重要なものであることは間違いないであろう。

３．レチタティーヴォ（アルト、ヴァイオリン２、ヴィオラ２、通奏低音）

「私たちは多くの苦難を乗り切り、神の国へ入らなければならないのです」聖書の使徒言行録14:22の言葉で、福音（ヨハネ16:16-23）の朗読を最も簡潔にまとている。わずか７小節という短い作品の中に、矛盾した性質（悲しみ/喜び）が凝縮された表現が聴きどころである。ハ短調でアルトの「*Trübsal*」（苦難）減三和音で下行する動き、弦楽４部の不協和な減三和音の響き、低声部の半音階的下行（最後は低いドの音）は悲しみを表し、すべての「*Trübsal*」から抜け出す道を指し示す第１ヴァイオリンがハ長調（ドレミファソラシド）で上行していく。上行した最も高いドが神の国との境界線を示している。

４．アリア（アルト、オーボエ、通奏低音）

アルトとオーボエ、そして通奏低音にて、キリスト者の生きていく歩みの中の苦悩や敵との闘争による苦しみを表していく。アルトは、ルターの十字架の神学である「神が真に人間に示して見せる恵みとは、イエス・キリストの受難と十字架である」ということを背景に、「キリストの傷がキリスト者の慰めとなる」と歌う。オーボエの幅広い音域の旋律と通奏低音の時折登場するアルトやオーボエの模倣した音楽は、ゆるぎない神への信仰を表している。

十字架と王冠というキリスト教の中でも重要な言葉が出てくるため、歌詞と共に補足する。

Kreuz und Krone sind verbunden（十字架と王冠が結びついている）
Kampf und Kleinod sind vereint（戦いと宝石は同じものである）

※現世での苦しみや苦難（十字架）を乗り越えることで、その後神の国へ行ける命の冠が授けられる（報酬：王冠）。これと戦い（闘争）と宝石（報酬）も例に挙げている。

※これらは以降のキリスト者に起こりえる苦悩と敵がいることを示唆している。

Christen haben alle Stunden（キリスト者にはどんな時も）
ihre Qual und ihren Feind,（苦悩があり、敵がいる）
doch ihr Trost sind Christi Wunden.（しかし、キリストの傷が彼らの慰めなのです）

５．アリア（バス、ヴァイオリン２、通奏低音）

変ホ長調で、バスは神の僕（しもべ）として、ふさわしい行動とは何かを示しながら「従う」ということを歌っていく。特徴はヴァイオリン２パート、通奏低音とバスパートが、同じ音型をメインモチーフとして、カノンのように連続的に反復演奏される。これは４．アリアの説明を受けた信者の反応を表している。「私は従います、私も従います、私も…」と多くの信者が「キリストの後をついて行き、彼のもとから離れない」「幸せなときも不幸なときも、生においても、死においても、キリストの恥辱に口づけし、彼の十字架を抱きしめよう」と応えていく。最後に歌う*Ich folge Christo nach von ihm will ich nicht lassen*（キリストの後をついて行き、彼のもとから離れない）は、実に低いＥbからオクターブをはるかに超える12度まで上行していき、この曲の全体のテーマである「従う」に強い信仰心を加えて締めくくっている。

６．アリア（テノール、トランペット、通奏低音）

「誠実（忠実）であれ！誠実（忠実）であれば、あらゆる痛みは小さなものになるであろう」と歌う。この曲は非常に特徴的な３パートの組み合わせで構成される。一つは通奏低音群のしっかりとした意思をもって明るい方向へ導こうと最後まで維持している。２つ目は対照的にテノールは「雨の後は祝福の花が咲く」喜びの感情を歌いつつも、全体的にはため息混じりのような旋律で現実が辛く苦しいものであることを示している。そして３つ目は*Jesu, meine Freude*（イエス、わが喜び：*Johann Frank* 作のコラール）を編曲したトランペットの旋律が加わり、「あなた以外には、この地上で愛しいものはいない」「イエスよ私の喜びであり続けます」などこのコラールの各節の重要なメッセージが加わる。このトランペットの旋律は１曲目のシンフォニアのオーボエの旋律と好対照を成している。

７．コラール（ＳＡＴＢ、ヴァイオリン２、ヴィオラ２、オーボエ、トランペット、通奏低音）

終曲は*Was Gott tut, daß ist wohlgetan*（神の行う事は、すべてが良いことです：*Samuel Rodigast* 作のコラール第６節）をトランペットの旋律を加えた５声のコラール。「神の行う事は、すべてが良いことです。私はそこに留まり続けます。この険しい道では苦しみ、死、貧困が追い立てるでしょう。それでも神は私を、まさしく父親がするように、その腕の中で守ってくれます。だから私は神にすべてを委ねる」これまでの６曲の内容がこの歌詞の中で歌われ、そして最後は長調で輝かしく歌いあげて締めくくる。

文責：谷川　晃

指揮 ◆ 谷川 晃 *Akira Tanikawa*

指揮者、声楽家、ボイストレーナー、編曲者、音楽プロデューサーのかたわらステージ企画及びマネージャーも務める。師である笹倉強先生とは30余年に渡る音楽活動を通じて信頼も厚く、当団の第7回演奏会《J.S.バッハの世界》（2021年6月）ではミサ曲ト長調BWV236ステージを指揮する。同年7月よりブルク・バッハ室内合唱団常任指揮者に就任。

これまで声楽（合唱、オペラ、独唱）、室内楽、ピアノなどの鍵盤楽器、打楽器など、ルネサンスから近現代の作品に幅広く取り組む。

近年の活動として2023年からSerendipityシリーズ「声楽家×作家×ジャズ音楽会」「クラシック×シャンソン×ジャズの演奏会」「ドイツ音楽の世界×文学的アプローチの音楽会」「映画音楽の愉しみ」「日本語の詩×音楽×舞踊」を開催。学生や若手からベテランまで世代を超えた音楽家たち、さらに志ある音楽愛好家の参加など、幅広く表の場を創出し、ジャンルの異なる音楽家60人以上、作家、言語学者、ダンサーとのコラボレーションを実現している。日本を代表する音楽家とビジネスパーソンの共演による本邦初演の音楽劇や声楽ヴィルトゥオーゾと現役音大生のアンサンブルなど、類を見ない構成に出演者からの評価も高い。

バッハではカンタータBWV82、BWV112、ヨハネ受難曲BWV245、クリスマスオラトリオBWV248などを取り上げ、 その他、多数の国内外の作品（團伊玖磨、一柳慧、プッチーニ、プーランクなど）を解説付きで演奏し好評を得ている。

男声合唱団ブルクメンネルコール、室内楽コンチェルティーノ、アンサンブルSONOS指揮者、音楽プロデューサー。Music Office Sonus代表。日本声楽家協会正会員、電子情報通信学会正会員。

ピアノ ◆ 鶴井 弥葉 *Miyo Tsurui*

武蔵野音楽大学卒業。東邦音楽大学総合芸術研究所伴奏法コース修了。ピアノと伴奏法を故白石隆生氏に、ピアノを森口みちる、石川晴子、故千葉みどり、故松隈陽子の各氏に師事。ドレスデン音楽マスターコースに参加、修了演奏会に出演。

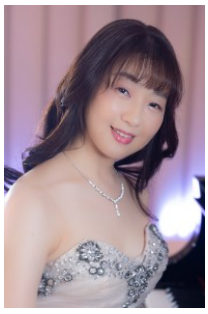
第24回国際芸術連盟新人オーディションに合格、新人推薦コンサート出演。第6回長江杯国際音楽コンクールにてソロ部門奨励賞受賞。同コンクールアンサンブル部門第2位(1位なし)。

2013年に「トリオ・カンナ」を結成。ロシア・ウラジオストク秋季音楽祭に招聘される他、プラハ、イギリス各地でツアーを行う等、国内外でコンサート活動を行う。

ハイドンシンフォニエッタ東京として「ヴァンハル・ピアノ三重奏曲集Op.5」をリリース。

合唱、オペラなど声楽の伴奏や室内楽など、多くの演奏家と共演し幅広く活動する傍ら、後進の指導も行っている。

ピアノ ◆ 徳増 百合子 *Yuriko Tokumasu*



武蔵野音楽大学卒業。複数回に渡りフランス、ビアリッツでの夏期講習会に参加、ピアノをジェルメン・ドゥヴェーズ女史にソルフェージュをザビーネ・ラクワレ女史に師事し修了演奏会に出演する。ヴァディム・サハロフ氏のフランスでのセミナー参加。

第16回彩の国埼玉ピアノコンクール奨励賞受賞。

第14回PIARAピアノコンクール信越地区大会最優秀賞を受賞、また浜松市にて行われたPIARAピアノコンクール全国大会、大学・一般部門第2位及びスタインウェイ奨励賞を受賞。

第18・19回ヤングアーチストコンクール一般部門優秀奨励賞を受賞し第11回ヤングアーチストピアノコンチェルトに出演する。

ピアノを武山百合子、澤田紀子、藤村佳美、村上千佳、丸山徹薫の各氏に師事。ピアノ教室Clair(クレール)主宰。声楽、室内楽のピアニストとしても、活躍している。

メゾソプラノ ◆ 後藤 真菜美 *Manami Goto*

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院音楽研究科修士課程オペラ専攻修了。第12回東京国際声楽コンクール新進声楽家部門全国大会第2位。第5回マルゲリータグリエルミ声楽コンクール新進歌手部門第1位。第67回藝大オペラ定期公演モーツァルト《魔笛》侍女Ⅲでオペラデビュー。《カルメル会修道女の対話》マリー修道女、《コジ・ファン・トゥッテ》ドラベッラ、《フィガロの結婚》ケルビーノ、ビゼー《カルメン》メルセデスなどを演じる。また大学院在学時には、学内オーディションに合格し、朝日新聞社主催の第72回藝大メサイアのアルトソリストを務める。他にもベートーヴェン《第九》、モーツァルト、デュリュフレ《レクイエム》 、ジェンキンス、ペルゴレージ《スターバト・マーテル》、バッハ《マタイ受難曲》《ヨハネ受難曲》にソリストとして出演。これまでに小宮順子、甲斐栄次郎、手嶋眞佐子、L.ゴルラ、M.グリエルミ、新垣有希子の各氏に師事。現在、新国立劇場オペラ研修所第26期生として研鑽を積む。ANAスカラシップ奨学生としてバイエルン州立歌劇場付属オペラ研修所（ミュンヘン）、ミラノスカラ座アカデミーにて海外研修を受ける。

テノール ◆ 河野 泰佑 *Taisuke Kono*

埼玉県新座市出身。幼少期をロンドンで過ごす。慶應義塾大学法学部法律学科卒業。証券会社で2年間の勤務ののち、東京藝術大学声楽科を経て東京藝術大学大学院オペラ専攻を修了。

第68回藝大オペラ定期公演『コジ・ファン・トゥッテ』でフェッランド役、第72回藝大メサイアでテノールソリスト、モーツァルト『レクイエム』ソリストなどを務めたほか、シューマン『詩人の恋』『リーダークライス 作品39』、シューベルト『美しき水車小屋の娘』、R.シュトラウス『”最後の花びら”より8つの歌』などドイツ語の歌曲作品も積極的にコンサートで取り上げている。

これまでに声楽を佐野成宏、萩原潤の各氏に師事。

バリトン ◆ 高橋 宏典 *Kosuke Takahashi*

長野県佐久市出身。佐久長聖中学・高等学校卒業。

東京藝術大学声楽科、同大学大学院オペラ専攻修了。

在学中に安宅賞、アカンサス賞を受賞。青山財団奨学金、宮田亮平奨学金奨学生に選ばれる。

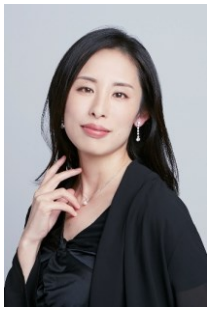
オペラでは藤原歌劇団公演に出演するほか、《椿姫》ジェルモン、《ランメルモールのルチア》エンリーコ、《ラ・ボエーム》マルチェッロ、《カルメン》エスカミーリョ等を演じ、好評を得ている。

『第九』『モーツァルトレクイエム』『メサイア』『カルミナブラーナ』等にて、ソリストとして出演を重ねている。

声楽を関口信雄、藤沼昭彦、朝倉喜久子、豊島雄一、勝部太、萩原潤、五十嵐麻利江、各氏に師事。

藤原歌劇団団員。日本オペラ協会会員。

オルガン ◆ 加藤 麻衣子 *Maiko Kato*



エリザベト音楽大学演奏学科、東京藝術大学大学院音楽研究科卒業（パイプオルガン）。

2008年より渡仏。トゥールーズ高等芸術院でオルガンの国家演奏家資格を、トゥールーズ音楽院でチェンバロのDEMを審査員の満場一致賞賛付きで取得。2010年ジャン＝ルイ・フローレンツ国際オルガンコンクール優勝、フランス芸術院よりグランプリ受賞。2013年ジルバーマン国際オルガンコンクールファイナリスト。グザヴィエ・ダラス国際オルガンコンクール第3位、聴衆賞受賞。フランス各地の音楽祭やラジオ番組に出演し、サックブチエやファブリス・ミリシェールとCDをリリース。

ルーテル学院中学・高等学校オルガニスト。

日本オルガン研究会、日本オルガニスト協会会員。

ホームページ：https://maikokato.com

オーボエ ◆ 酒井 弦太郎 *Gentaroh Sakai*

2000年生まれ、埼玉県出身。これまでにオーボエを戸田智子、小畑善昭、池田昭子、吉井瑞穂、佛田明希子の各氏に、バロックオーボエを三宮正満氏に師事。ディートヘルム・ヨナス、トーマス・インデアミューレ、ハンスイェルク・シェレンベルガー、モーリス・ブルグ各氏のレッスンを受講。第39回草津夏期国際音楽アカデミー、第11・13・14回小林道夫アカデミーin下田に参加。

2019年より東京藝術大学バッハカンタータクラブに所属し、2024年3月からは演奏委員長（指揮）を務めている。各地の教会でバッハ作品の演奏を重ねる他、古楽器を通したピリオド奏法へのアプローチも行っている。また並行して、現代の音楽における奏法や解釈を研究し、意欲的に活動を展開している。アンサンブル・リーム、オーケストラ・ニッポニカ等の公演に参加する他、新作を含む20世紀以降の作品の初演・再演に学内外で多く携わっている。

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、同大学別科器楽専修（1年間）、同大学音楽学部器楽科を経て現在東京藝術大学大学院音楽研究科2年次。

学部在学中、公益財団法人樫山奨学財団奨学生、及び2020年度同財団成績優秀賞。学部卒業時に同声会賞、アカンサス音楽賞。オーケストラ・ニッポニカ第38回定期演奏会に対し佐治敬三賞。

アンサンブル室町、木管五重奏団Crayons、Verrine Quintet 各メンバー。

室内楽 ◆ 東京藝術大学バッハカンタータクラブ *Bach Kantaten Club*

バッハのカンタータ作品を演奏することが目的で1970年に結成。今年で創立54年を迎える。指導者には小林道夫氏を、顧問には故・服部幸三氏を迎え、活動を開始した。部員は声楽科・器楽科の学生に限らず約70名が在籍しており、年間5回の演奏会を中心としている。また、 卒業生には国内外の音楽界で活躍するもの、古楽演奏の指導的立場にいるものも多い。

前田 遥紀
ヴァイオリン

清原 百合乃
ヴァイオリン

難波　洸
ヴィオラ

浅野 珠貴
ヴィオラ

谷川 萌音
チェロ

北山 木乃香
ファゴット

伊賀 公亮
トランペット

合唱・ソプラノ ◆ 金久 朋未 *Tomomi Kanehisa*

名古屋市立菊里高等学校、武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科卒業。ドイツ・ドレスデン音楽セミナー、杉オペラ演技研究所、旧（財）オペレッタ協会主催ヴァラディ・カタリン女史による歌役者養成セミナー等で研鑽を積む。

ニュー・オペラ・プロダクション（NOP）、旧（財）オペレッタ協会に所属し、オペラ・オペレッタ・コンサートに主要キャスト、アンサンブルキャストとして多数出演したほか、第九のソリストをつとめるなど、舞台経験を積む。

現在、愛知県在住。合唱指導や、個人・アンサンブルの歌の指導に携わる傍ら、ジャンルにとらわれず様々な舞台や小中学校の音楽鑑賞教室、コンサート等に出演し、東京、愛知を中心に活動を続けている。

Airy Twins Ensemble、Art Mewの一員として活動。愛知芸術文化協会 ANET所属。

ブルク・バッハ室内合唱団とのつながりは20年ほど。

学生時代に、ブルク・バッハ室内合唱団の設立者である笹倉強先生より合唱の指導を受け、その数年後、ふとしたきっかけから前身ブルク室内合唱団に参加することとなり、発声指導などに携わりながら、団員とともに歌ってきた。

合唱・ソプラノ ◆ 浦野 なつき *Natsuki Urano*

お茶の水女子大学文教育学部芸術・表現行動学科音楽表現コースを経て、同大学院修了。

2017年、東京シティオペラ協会公演「シンデレラ」の妖精役でオペラデビュー。第27回日本クラシック音楽コンクール大学女子の部全国大会入選。第73回東京国際芸術協会新人演奏会オーディション奨励賞受賞。2021年には、及川音楽事務所第52回新人オーディションにて優秀新人賞を受賞。

及川音楽事務所所属。

これまでに声楽を祝佳子、秋山隆典、栗林朋子の各氏に師事。

合唱・アルト ◆ 江原 延子 *Nobuko Ehara*

武蔵野音楽大学卒。

声楽を市田キヨ子、松井康司氏に師事。

現在ライアーを伴奏に、唱歌、童謡を使用した嚥下トレーニングを高齢者施設で行っている。

よみうりカルチャーセンターライアー講師。

ライアー響会会員、日本唱歌童謡教育学会会員。

鬼滅オタクの前期高齢者。

合唱 ◆ ブルク・バッハ室内合唱団 *Burg Bach Kammer Chor*

ブルク・バッハ室内合唱団は、世俗曲、宗教曲を始めとするクラシック曲や現代曲を通して、音楽により相互の理解と信頼を深め、人間的成長をめざしています。

2003年 1月　笹倉強氏（2021年6月まで常任指揮者）「ブルク室内合唱団」設立
2005年 5月　コラール・エヴァ女史による研究会を主催（日本コダーイ協会後援）
（りとるかりん）
2006年 7月　日本コダーイ協会主催「世代をつなぐア・カペラの響き」参加出演
（津田ホール）
2006年11月　「第1回演奏会～ア・カペラ＆カンタータの世界I～」開催
（日本大学カザルスホール）
2008年 6月　バッハゆかりの地を訪ねる旅主催（アイゼナハからライプツィヒへ）
2008年 9月　「ふれあーコンサート」参加出演（新宿文化センターホール）
2009年 1月　「第2回演奏会～ア・カペラ＆カンタータの世界Ⅱ～」開催（浜離宮朝日ホール）
2009年12月　「ブルク・バッハ室内合唱団」に改名
2010年 6月　コチャールM氏のセミナーを主催（志木ふれあいプラザ）
2011年 2月　「第3回演奏会～ア・カペラ＆カンタータの世界Ⅲ～」開催（浜離宮朝日ホール）
2013年 3月　「第4回演奏会～ア・カペラ＆カンタータの世界Ⅳ～」開催（浜離宮朝日ホール）
2013年 7月　「日本コダーイ協会全国大会 in Tokyo 2013」参加出演
（かつしかシンフォニーヒルズ）
2015年 4月　「第5回演奏会～ア・カペラ＆カンタータの世界Ⅴ～」開催（浜離宮朝日ホール）
2016年 9月　岡部申之氏のセミナーを主催（にいざほっとぷらざ）
2017年 4月　「第6回演奏会～ア・カペラ＆カンタータの世界Ⅵ～」開催（浜離宮朝日ホール）
2018年 5月　「ぼあかるむ演奏会」参加出演（ふるさと新座館）
2021年 6月　「第7回演奏会」開催（新座市民会館）
2021年 7月　谷川晃氏、常任指揮者に就任
2024年10月　「第8回演奏会」開催（彩の国さいたま芸術劇場音楽ホール）

ソプラノ	河野 優美子	小林 恵子	髙田 ミチ子	長谷部 知美	深津 詔子
	宮内 よし江	森田 素子			
ア ル ト	大橋 浩美	滝北 久子	古田 千鶴子		
テノール	新井 亨	藤田 廣志	森田 牧朗		
バ ス	上島 雅人	近藤 智生	永井 有司		

ブルク・バッハ室内合唱団で一緒に歌いませんか

丁寧で分かりやすい指導のもと、和気あいあいと楽しく合唱しています
音取りのフォローもあり、初心者の方でも大歓迎です

Burg Bach Kammer Chor

常任指揮者：谷川　晃
練習曲：バッハのほか、ルネサンスから現代までの宗教曲、邦人作品など

練習日：金曜日午後7時～9時（月2回）、土曜日午後1時～3時（月1回）
練習会場：りとるかりん（北朝霞駅・朝霞台駅）、東北コミセン（志木駅）
会費：月4,000円＋演奏会積立金、入会金1,000円
お問合せ：burgbach@gmail.com　090-3915-1297（深津）

合唱団
公式サイト